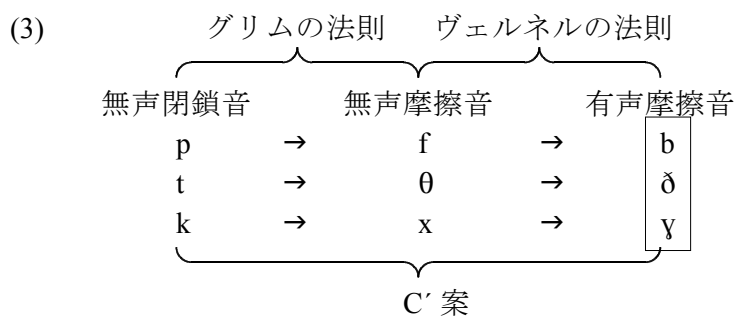
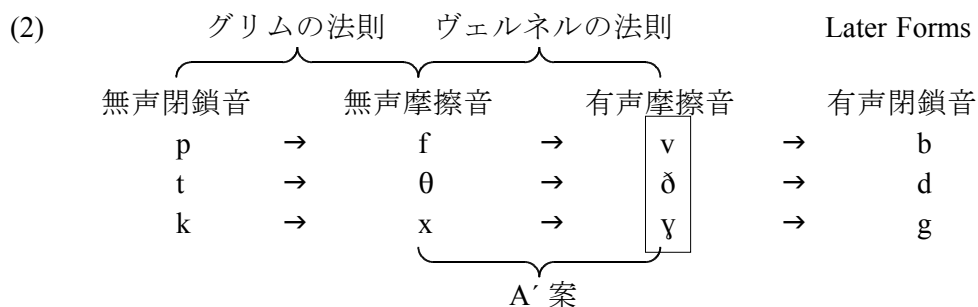
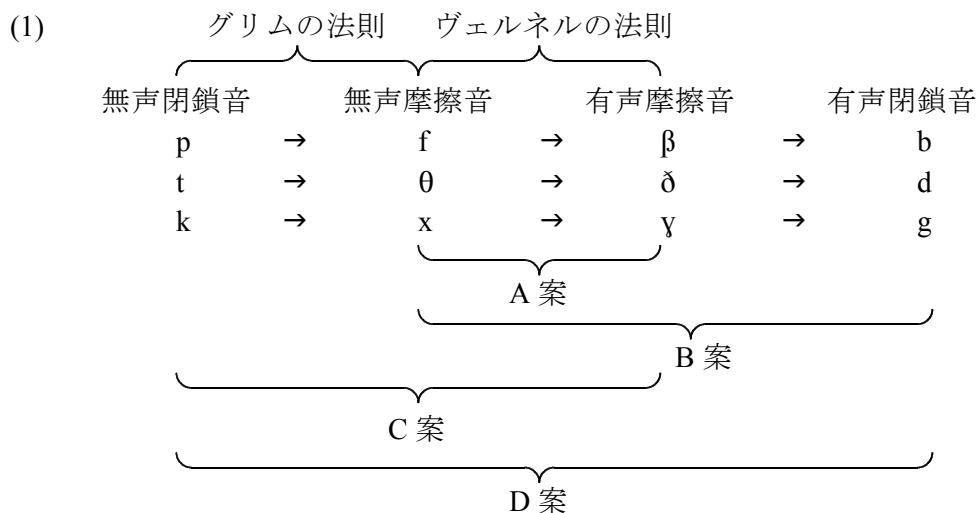


ゲルマン祖語における子音変化の記述をめぐって

北海学園大学人文学部 上野 誠 治

0. はじめに



(4) Grimm's Law (Cf. Pyles and Algeo 1993:90)

- PIE bh, dh, gh → Gmc b, d, g
- PIE p, t, k → Gmc f, θ, x (→ h initially)
- PIE b, d, g → Gmc p, t, k

# 1. 無声摩擦音 → 有声摩擦音 (A 案)

(5) 松浪ほか (1983:156)

グリムの法則によれば印欧基語の無声閉鎖音 p, t, k はゲルマン語で無声摩擦音 f, θ, χ になったが、有声摩擦音 β, ð, γ になることがあった。(中略) そこで印欧基語において無声摩擦音の直前の母音に主なアクセントが置かれていない時には、ゲルマン語の無声摩擦音は有声摩擦音になったと考えられる。

(6) p, t, k → f, θ, χ → β, ð, γ  
                                 ↓                                ↓  
                                 グリムの法則                                ヴェルネルの法則

(7) 松浪ほか (1983:156 関連部分のみ)

(i) PIE p > Gmc β

Skt saptá, Goth sibun (b は[β]), OE seofon (=seven)

(ii) PIE t > Gmc ð

Skt pitá, Goth fadar (d は[ð]), OE fæder (WGmc で[ð] > [d]) (=father)

(iii) PIE k > Gmc γ

Skt śvaśrús (2 番目の ś は k が口蓋化したもの), OE sweđer (=mother-in-law)

(8) O'Grady and Archibald (2000:305)

PIE	Sanskrit	Grimm's Law	Verner's Law	Gothic
*t	bhrátā	*t > θ	—	[bro:θar] 'brother'
*t	pitā	*t > θ	θ > ð	[faðar] 'father'

(9) Baugh and Cable (2002:22)

It was noted that between such a pair of words as Latin *centum* and English *hundred* the correspondence between the *c* and *h* was according to rule, but that between the *t* and *d* was not. The *d* in the English word should have been a voiceless fricative, that is a *þ*. In 1875 Verner showed that when the Indo-European accent was not on the vowel immediately preceding, such voiceless fricatives became voiced in Germanic. In West Germanic the resulting ð became a *d*, and the word hundred is therefore quite regular in its correspondence with *centum*.

(10) 宇賀治 (2000:12)

Rask も Grimm も上記第 1 段階の推移で、印欧祖語の p, t, k が s とともに、ゲルマン語派では常に期待どおりに f, þ, h, s へ推移するとは限らず、語中と語末で有声化して b, ð, g, z (古英語ではさらに変化して f [v], d, g, r となる) 場合があることに気づいていた。(中略) すなわち、ゲルマン祖語で問題の子音は、それに先行する母音にアクセントがあれば期待どおりに無声摩擦音(voiceless fricative [spirant]) へ推移するが、アクセントがなければ有声摩擦音が現れる。これをヴェルネルの法則(Verner's law)と呼ぶ。

(11) マルティネ (2003:95)

古いアクセントが語の第一音節に固定したアクセントに置き換えられる以前の段階で、\*p, \*t, \*k, \*k<sup>w</sup> に起因する無声摩擦音[ϕ, θ, χ, χ<sup>w</sup>]及びスー音\*s は、これらが語頭にない場合でその直前にアクセントがない場合に、有声化してそれぞれ[β, ð, γ, γ<sup>w</sup>]となった。したがって、これらのうち前の四者は\*b, \*d<sup>h</sup>, \*g<sup>h</sup>, \*g<sup>hw</sup>

の結果と合一した。この結果、\*k̄m̄tóm「100」はまず[χunθám]となった。語頭の[χ-]は無声のままであったが、語中の[-θ-]はアクセントの直後ではなく直前にあったため有声化して[-ð-]となり、[-n-]に隣接していたため硬化して[-d-]となった。アクセントが第一音節に移ると語尾の[-am]は脱落した。語頭の[χ-]は普通[h-]となる。以上より *hund* が得られ、これはこのままの形で、あるいは合成語 *hundred* の一部として実証される。この一連の変化の定式化を行ったのはデンマーク人 Karl Verner であり、そのためこれはヴェルナーの法則の名で知られている。

(12) 中島 (1979:89)

以上の対応の中(1)の Gmc *f, þ, h* は *s* とともに、ときに有声摩擦音(*ð, ð, g, z*)になることがある。それはこれらの子音が語中であって、その語のアクセントがそれぞれの子音に先立つ音節にないときである。例えば L *pater* と OE *fæder* ('father')を比較すると *p-f* の対応はグリムの法則で説明がつくが、*t-d* の対応は *t-þ* という規則にそむく。しかしこれは IE 本来のアクセント法により Gmc 以前においてアクセントが、後の音節にきて \**fapér* であったため *þ* が有声化し、Gmc で \**fader* として現れ、これが OE *fæder* に発達したと説明される。このアクセントの位置による子音変化が Verner's Law と呼ばれるものである。

(13) 高津 (1954:64)

以上の推移の中で、ゲルマン語で IE の無声閉鎖音が無声の摩擦音となって現れるのは語頭及び共通基語のアクセントが直前の音節にあった時に限り、その外の場合、即ち共通基語のアクセントがその直後の音節或は一音節以上前であった場合には、無声摩擦音は有声化している (例 Skt. *pitár-*, Gr. *πατήρ* : Goth. *fadar* と Skt. *bhrátar-*, Gr. *φράτηρ* : Goth. *broþar-*)。この条件をその発見者によって「Verner の法則」という。また鼻音の後では有声摩擦音は更にゲルマン語共通基語時代に既に有声閉鎖音 *b, d, g, g<sup>w</sup>* となっていたものと思われる。【現代仮名遣い】

(14) 寺澤 (1997:484-485)

◇OE *fæder* — *brōþor* 'BROTHER' の語間子音 /d/ — /ð/ の対応は Verner's Law により説明がつく。Grimm's Law によれば IE *t* は Gmc *þ* に対応するが、OE *fæder* と *brōþor* の場合は IE においてそれぞれ \**pátér-*、\**bhrátér-* のようにアクセントの位置が異なっており、前者のように直前の音節にアクセントを持たない場合は Gmc *þ* は有声化して *ð* (OE *d*) となり、逆に後者のように直前の音節にアクセントを持つ場合はこの有声化が阻止された (ただし *þ* は OE では有声音の間で有声化した)。Gmc *ð* は WGmc では *d* となる。OE *fæder* の *fæ-* は開音節であるため ME *fāder* となった。他方 ME の屈折形 *fadres* では *fad-* は閉音節であるため長音化せず、これの類推形 *fāder* も ME で用いられた。前者の ME *fāder* が規則的に発達すれば ModE 形は /féiðə/ となるはずだが、ME *fāder* が標準語形となった。また ModE /ð/ は ME から ModE への過渡期に *r* の前で /d/ が変化したもの(cf. GATHER, HITHER, MOTHER<sup>1</sup>, TOGETHER, WEATHER, WHETHER: 逆の /ð/→/d/ の変化については cf. BURDEN<sup>1</sup>, RUDDER)。

(15) 吉田 (1996:113-114)

たとえば、古英語の *brōþor*「兄弟」と *fæder*「父」のあいだにみられる *þ* と *d* の違いは、*brōþor* の場合はヴェルネルの法則がはたらいたときにアクセントは直前にあったが (対応するギリシア語の *phrátēr* を参照。印欧祖語のアクセントを書かれた記録のなかに残している代表的な言語は、ギリシア語とサンスクリット語である)、*fæder* の場合はアクセントが後ろにあったことによる (対



Gmc \*sebunða- (< IE \*sepmtó- (子音重複のため最初の *t* を消失)) の影響で消失した。

(21) 田中ほか (1982:246)

これは不規則な変化であり、グリムは例外としたが、共通基語のアクセントの位置によって p, t, k は β, ð, γ として現れることがある ということを、ヴェルナーが証明した。これをヴェルナーの法則という。

(22) ギルマイスター (2000:13)

古インド語	bhrā́tā	古英語	brōþor	印欧語	*bhrā́ter
古インド語	pitā́	古英語	fæder	印欧語	*pátér
古インド語	satám	古英語	hund	印欧語	*kʰmtóm

閉鎖音 p, t, k は摩擦音 f, β, γ への途上で有声の異音 b, d, g (同様に摩擦音) を発達させたらしく、それらがつぎに印欧語 bh, dh, gh からの結果と一致した。したがって印欧語で第1アクセントが直前に来ない時には、ゲルマン祖語で f, β, γ の代わりに有声摩擦音 b, d, g が現れる。

(23) 安藤 (2002:32)

印欧祖語の p, t, k は、[ゲルマン語では] 有声音の間にあつて直前の音節にアクセントがあれば、規則通り f, θ, h になるが、直前の音節にアクセントがなければ、b, ð, g となる

p — b:	Skr	saptá	Goth	sibun	‘seven’
t — ð:	L	pater	Gmc	*faðēr	‘father’
k — g:	Lith	sakýti	ON	segja	‘to say’
s — z, r:	PIE	*dheusó	Goth	diuza / OE	dēor ‘animal’

#### 4. 無声閉鎖音 → 有声閉鎖音 (D 案)

(24) Bambas (1980:43)

Other parts of Verner’s Law settled a controversy involving apparent exceptions to Grimm’s Law, like the words *centum* > *hundred*; *hund* should be *hunth* according to Grimm’s Law, but, according to Verner’s stress-pattern theory, **t became d** when the IE stress did not precede the consonant in medial position.

(25) 小野 (1980:10)

印欧語の強勢が無声閉鎖音の後にあるとき (たとえば \*pátér) は、その無声閉鎖音はゲルマン語においては有声閉鎖音となる—\*pátér > \*fadér > \*fáder。これを一般に ‘Verner’s law’ という。

(26) 桜庭 (1982:23)

すなわち IE p, t, k は上記の場合には f, th(b), h とはならないで、それぞれ b, d, g になる というのである。これが「フェルネルの法則」(Verner’s Law)と呼ばれるものである。

(27) 安井 (1996:850)

フェルネルの法則は、直前に強勢をもたない インドヨーロッパ祖語(PIE)の無声

子音が、ゲルマン祖語(PGmc)では有声化する、という規則性をとらえたものである。一例をあげると、[PIE] \**pátér* (\*は推定形を示す) の語中の *t* が古期英語では *fæder* に見るように *d* に変化しているが、それは、直前に強勢をもたないインドヨーロッパ祖語の *t* が、ゲルマン諸語の 1 つの古期英語では、有声化されたからである。

(28) Trask (2000:362)

Specifically, PIE *\*p t k/*, instead of developing as usual into Germanic */f θ x/*, develop into voiced plosives */b d g/*. For example, the inherited */p t k/* of Greek *hypér* ‘over’, *patér* ‘father’ and *hekyrá* ‘mother-in-law’ are matched by */b d g/* in Old High German *ubar*, Old English *fæder*, and Old High German *swigur*.

(29) McMahon (1994:23)

The second problem is rather more complex: although Grimm’s Law predicts that PIE voiceless stops should become Germanic voiceless fricatives, they sometimes appear as Germanic voiced stops or voiced fricatives. PIE *\*bhrātēr-* ‘brother’ becomes Gothic *brōþar*, with medial *\*t > /θ/*, but PIE *\*pátēr-* ‘father’ becomes Gothic *fadar* with a medial voiced */d/*.

(30) Campbell (2001:91)

Proto-Indo-European	Sanskrit	Gothic	
*septém-	saptá	sibun	“seven”

Figure 4.3 Examples illustrating Verner’s law

By Grimm’s law, we expect the *p* of Sanskrit to correspond to *f* in Gothic, not the *b* found in this Gothic word, and given the *b* of Gothic, we would expect Sanskrit to have *bh*. Verner’s law explains this exception to Grimm’s law. When the Proto-Indo-European accent followed the sound in question (and it was not the first sound in the word), as seen in Sanskrit *saptá* (*á* is accented), *\*p* became *b* in Germanic, as in the Gothic word; otherwise, Grimm’s law applied.

## 5. グリムの法則とヴェルネルの法則の接続

(31) PIE	Gmc
p t k k <sup>w</sup>	f θ χ χ <sup>w</sup>
b d g g <sup>w</sup>	p t k k <sup>w</sup>
bh dh gh g <sup>w</sup> h	b d g (g <sup>w</sup> )

(松浪ほか 1983:155)

- (32) a. 無声閉鎖音 (p, t, k) → 無声摩擦音 (f, θ, χ)  
 b. 有声閉鎖音 (b, d, g) → 無声閉鎖音 (p, t, k)  
 c. 有声有気閉鎖音 (bh, dh, gh) → 有声無気閉鎖音 (b, d, g)

(33) p → f → β

└──────────┘ └──────────┘

グリムの法則    ヴェルネルの法則

- (34) a. 「有気」「声」「調音点」の特徴は変えずに、「調音法」の特徴を閉鎖から摩擦に変える。  
 b. 「有気」「調音点」「調音法」の特徴は変えずに、「声」の特徴を有声から無声に変える。  
 c. 「声」「調音点」「調音法」の特徴は変えずに、「有気」の特徴を有気から無気に変える。

(窪菌 2009:51、順序改変)

- (35) グリムの法則は、子音を構成する成分（音声素性）のうちの1つが変化する音現象なのである。

(窪菌 2009:52)

- (36) (i) b 有声両唇閉鎖音 voiced bilabial stop  
 (ii) p 無声両唇閉鎖音 unvoiced bilabial stop

b → p, \*b → t, \*d → p

- (37) (i) p 無声両唇閉鎖音 unvoiced bilabial stop  
 (ii) f 無声唇歯摩擦音 unvoiced labiodental fricative  
 (iii) φ 無声両唇摩擦音 unvoiced bilabial fricative  
 (iv) β 有声両唇摩擦音 voiced bilabial fricative

- (38) ブランショ (1999:104)

インドヨーロッパ祖語	>	ゲルマン祖語
*[p t k kʷ]		*[φ θ x xʷ]
*[b d g gʷ]		*[p t k kʷ]
*[b <sup>h</sup> d <sup>h</sup> g <sup>h</sup> g <sup>hw</sup> ]		*[β > b; ð > d; γ > g; γʷ > gʷ]

- (39) マルティネ (2003:95) (前掲(11)の前半)

古いアクセントが語の第一音節に固定したアクセントに置き換えられる以前の段階で、\*p, \*t, \*k, \*kʷ に起因する無声摩擦音[φ, θ, χ, χʷ]及びスー音\*sは、これらが語頭でない場合でその直前にアクセントがない場合に、有声化してそれぞれ[β, ð, γ, γʷ]となった。したがって、これらのうち前の四者は\*b, \*d<sup>h</sup>, \*g<sup>h</sup>, \*g<sup>hw</sup>の結果と合一した。

- (40) Ringe (2006:94)

PIE voiceless stops became PGmc fricatives, provided that they were not immediately preceded by another obstruent (. . .). It seems overwhelmingly likely that the fricatives originally exhibited the same place of articulation as the stops from which they developed; in other words, there is no reason to believe that this could change was automatically accomplished by any change in place of articulation. **Thus the original changes will have been \*[p] > \*[φ], (\*t/=) \*[t] > \*[θ], and so on;**

- (41) PIE p → Gmc f

pātēr	father	pulo-	foal
pisk-	fish	ped-	foot
pūr-	fire	peku-	fee (cf. Ger. Vieh 'cattle')
prtu-	ford		

(Cf. Pyles and Algeo 1993:88)

(42)  $p \rightarrow \phi \rightarrow f$

グリムの法則

(43) 第1次子音推移（グリムの法則）によって得られた子音は、該当する子音に先行する音節が本来的に強勢を有していた場合を除き、有声音間で有声化する：  
例) \*kmtóm “100” > Gmc. \*[χumθám] > \*[χunθám]（鼻音の調音点が後続音に同化）> \*[χunðám]（θの有声化）> \*[χundám]（ðの硬化）> \*hund（アクセント第1音節に固定、語尾音節の消失）> e.g. E. hundred (\*hund + \*red “number” (<\*rǣ-to- <√\*rē- “to count” ))。

(神山 2006:76)

(44)  $k \rightarrow \chi \rightarrow h$  (initially)

グリムの法則

(45) In early OE <sc> would have been pronounced [sk], but by late OE times it had become [ʃ], and can be recognised in MnE reflexes by the later spelling <sh>.

scacan *shake*      sciold *shield*      scyttan *shut*  
flæsc *flesh*      scort *short*      þrysce *thrush*

(Freeborn 2006:18)

(46) 

Sanskrit	Greek	Latin	Gothic	English
saptá	heptá	septem	sibun [siβun]	seven

(Campbell 2004:162、関連部分のみ)

(47)  $p \rightarrow \phi \rightarrow \beta$

①      ②

→ v seofon, seven  
→ β sibun

(48)  $p \rightarrow \phi$

①      ②

→ f fadar, fæder, father  
→ β → v seven  
→ β sibun

(49) PGmc の子音組織

	唇音	歯茎音	口蓋音	軟口蓋音	唇軟口蓋音
閉鎖音 無声	p	t		k	k <sup>w</sup>
閉鎖音 有声	b [b, β]	d [d, ð]		g [g, ɣ]	
摩擦音 無声	f	θ, s		x [x, h]	x <sup>w</sup>
摩擦音 有声		z, ǵ		ɣ	ɣ <sup>w</sup>

(小野・中尾 1991:93 関連部分のみ)

(50)

bilabial	dental	alveolar	velar	labiovelar
p	t		k	k <sup>w</sup>
b	d	z	g	g <sup>w</sup>
f	ɸ	s	h	h <sup>w</sup>
m	n			
	l	r		

(Ringe 2006:214)

(51) The labial fricative tended to become labiodental, but that too must be a post-PGmc development, at least in part: it is fairly likely that **Gothic *f* was still bilabial** (. . .), and in ON this fricative remained bilabial when immediately followed by *t* (. . .). **The traditional spellings for the PGmc outcomes of this part of Grimm’s Law are \*f, \*ɸ, \*h, \*h<sup>w</sup>, and I will continue to use them throughout this book**; but the reader should remember that they are not intended to be representatives of the actual phonetics of the PGmc phonemes.

(Ringe 2006:94)

(52) It is likely that **\*/f/ was still bilabial**, though it eventually became labiodental in all the daughters (except, probably, Gothic).

(Ringe 2006:215)

(53) /ɸ/ represents a bi-labial fricative (**like /v/, but with both lips together rather than with the top teeth on the bottom lip**), and /ɣ/ represents a velar fricative rather than a gurgle.

(Kleinman 2002:1)

(54) . . . and /β/ is **similar to /v/** (to which it develops in PDE), but **it is formed with both lips rather than with teeth and lips together** (as in Spanish *cabo*).

(Fulk 2008:142)

(55)

<u>Latin</u>	<u>Goth.</u>	
septem	sibun	‘seven’
centum	hund	‘hundred’
dux	(OE heretoga)	‘duke’

. . . . There was indeed a difference between the phonetic environments of those *p*’s that had gone to *b* (originally actually **ɸ**, a [v] **formed with the upper lip rather than the upper teeth**) and those that had gone to *f*.

(Robinson 1997:10)

(56) /b, d, g/: pronunciation depends on position in word; cf. *barn* /barn/. ‘child’, ***sibun* /sivun/**, ‘seven’, where /-v-/ is a bilabial [β]; *augō* /auɣo:/, ‘eye’; *dag* /dax/, ‘day’: *drigkan* /driŋkan/, ‘to drink’.

(Campbell 1991:516)

## 6. まとめ

(57)

グリムの法則		ヴェルネルの法則				
無声閉鎖音	無声摩擦音	有声摩擦音	有声閉鎖音			
p	→	ϕ	→	β	→	b
t	→	θ	→	ð	→	d
k	→	x	→	ɣ	→	g

### Appendix

#### (58) 注意すべき点

- ① ゴート語の発音に対する不正確な知識。  
 (例) **fadar** [faðar], **sibun** [siβun], **broþar** [bro:θar]  
 母音に挟まれた **d**, **b** はそれぞれ有声摩擦音の [ð], [β] である。他方、**þ** は母音に挟まれていても無声摩擦音 [θ] である。
- ② 古英語の発音に対する不正確な知識。
  - (i) 古英語の **þ**, **f** は母音に挟まれると有声音の [ð], [v] になる。  
 (例) **broþor** [bro:ðor], **seofon** [seovon]
  - (ii) ゲルマン基語の有声摩擦音 [ð] は、西ゲルマン語（古英語）で硬化して有声閉鎖音 [d] に変化する。
  - (iii) 古英語では、8世紀に有声摩擦音 [β] が有声閉鎖音 [v] に変化する。  
 (例) **seofon**
- ③ ラテン語の **centum** と英語の **hundred** を比較するような時、途中の子音変化を無視して、表面的に有声化した点（この例では、**t**→**d**）のみを取り上げて、それがヴェルネルの法則であるかのような説明。
- ④ **f** 両唇摩擦音 [ϕ] の可能性  
**b** 両唇摩擦音 [β] の可能性

## 参考文献

- 荒木一雄、安井 稔（編）（1992）『現代英文法辞典』三省堂。
- Aronoff, Mark and Janie Rees-Miller (eds.) (2001) *The Handbook of Linguistics*. Blackwell.
- 安藤貞雄（2002）『英語史入門』開拓社。
- Bambas, Rudolph C. (1980) *The Origin and History of The English Language*. University of Oklahoma Press. (鈴木榮一、佐藤修二（編注）（1981）『英語の歴史』金星堂.)
- Baugh, Albert C. and Thomas Cable (2002) *A History of The English Language*. Fifth Edition. Prentice Hall.
- ブランショ、ジャン・ジャック（1999）『英語語源学』森本英夫、大泉昭夫（訳）、文庫クセジュ 822、白水社。
- Burgess, Anthony (1992) *AMouthful of Air*. Vintage.
- Campbell, George L. (1991) *Compendium of the World's Languages*. Volume 1. Routledge.
- Campbell, Lyle (2001) “The History of Linguistics” in Mark Aronoff and Janie Rees-Miller (2001).
- Campbell, Lyle (2004) *Historical Linguistics*. Second Edition. Edinburgh University Press.
- Crystal, David (1997) *The Cambridge Encyclopedia of Language*. Second Edition. Cambridge University Press.
- Freeborn, Dennis (2006) Text Commentary Book – OE pronunciation - *From Old English to Standard English*. Third Edition. Palgrave Macmillan.  
([http://www.palgrave.com/language/freeborn/site/pdfs/Commentary\\_pdfs/27\\_Ch3\\_OE\\_pronunciation.pdf](http://www.palgrave.com/language/freeborn/site/pdfs/Commentary_pdfs/27_Ch3_OE_pronunciation.pdf))
- Fromkin, Victoria and Robert Rodman (1998) *An Introduction to Language*. Sixth Edition. Harcourt Brace College Publishers.
- Fulk, R. D. (2008) “English as a Germanic Language”. In Momma, Haruko and Michael Matto (eds.) (2008) *A Companion to the History of the English Language*.
- ギルマイスター、ハイナー（2000）『英語史の基礎知識』小野 茂（訳）、開文社出版。
- 神山孝夫（2006）『印欧祖語の母音組織』大学教育出版。
- Kleinman, Scott (2002) “The Sound Changes which Distinguish Germanic from Indo-European.” English 400: History of the English Language: Grammar Tutorial and Resources. California State University, Northridge.  
(<http://www.csun.edu/~sk36711/WWW2/engl400/gmcsoundchanges.pdf>)
- 窪菌晴夫（2009）「3. 音韻論」中島平三（編集）『言語学の領域（I）』、中島平三（監修）シリーズ朝倉〈言語の可能性〉、朝倉書店。
- 小泉 保（1984）『教養のための言語学コース』大修館書店。
- 高津春繁（1954）『印欧比較文法』岩波全書セレクション、岩波書店。
- 町田 健 他（編著）（1997）『言語学大問題集 163』大修館書店。
- 松浪 有、池上嘉彦、今井邦彦（編）（1983）『大修館英語学事典』大修館書店。
- マルティネ、アンドレ（2003）『「印欧人」のことば誌－比較言語学概説－』言語学翻訳叢書第9巻、神山孝夫（訳）、ひつじ書房。
- McMahon, April M. S. (1994) *Understanding Language Change*. Cambridge University Press.
- 中島文雄（1979）『英語発達史 改訂版』岩波全書 143. 岩波書店。
- O’Grady, William D. and John Archibald (1996) *Contemporary Linguistic Analysis*. Fourth Edition. Addison Wesley Longman.
- 小野 捷（1980）『英語史概説』成美堂。
- 小野 茂、中尾俊夫（1991）『英語史 I』英語学大系第8巻. 大修館書店。
- Pyles, Thomas and John Algeo (1993) *The Origins and Development of the English Language*. Fourth Edition. Harcourt Brace Javanovich College Publishers.
- Robinson, Orrin W. (1997) *Old English and Its Closest Relatives: A Survey of the Earliest Germanic Languages*. Stanford University Press.
- 桜庭一郎（1982）『英語史概要』篠崎書林。

- 田中春美ほか（1982）『言語学演習』大修館書店.  
寺澤芳雄（1997）『英語語源辞典』研究社.  
Trask, R. L. (2000) *The Dictionary of Historical and Comparative Linguistics*. Edinburgh University Press.  
上野誠治（2001）「ヴェルネルの法則の記述に関して」『人文論集』第 20 号、  
北海学園大学.  
上野誠治（2009）「ヴェルネルの法則に見られる記述の多様性とその原因について」  
『人文論集』第 44 号、北海学園大学.  
上野誠治（2010）「ゲルマン祖語における子音変化について」『学園論集』第 145 号、  
北海学園大学.  
宇賀治正朋（2000）『英語史』現代の英語学シリーズ 8. 開拓社.  
安井 稔（編）（1996）『コンサイス英文法辞典』三省堂.  
吉田和彦（1996）『言葉を復元する』三省堂.

*Seiji Ueno*  
[ueno@hgu.jp](mailto:ueno@hgu.jp)  
*HGU Department of English and Cultures*  
*4-1-40 Asahimachi, Toyohira-ku*  
*Sapporo, Hokkaido*  
*Japan*  
*062-8605*